『石清水物語』における伊予守の出家場面について

――釈迦出家の故事及び『海人の刈藻』との類似を通して――

新居和美

はじめに

『石清水物語』における伊予守の出家場面については、伊予守が同行させた舎人の辛い心情を「七多太子のこんでい駒をひき、かへりししやのくとねりも、是にはよもまさらじとおぼゆ」[1]（一四八頁）と表現していることから容易に想像できるように、釈迦の出家の故事になぞらえており、ほかの鎌倉時代物語の『海人の刈藻』や『苔の衣』などにも同じ趣向が見られる。また桑原博史氏は、伊予守の出家場面に関して『海人の刈藻』との類似を挙げ、「主人公の出家入山にからむ一連の事情が釈迦のそれになぞらえつつ表現されて行く点で、共通しており、かつ類型的なのである」[2]と述べられている。以前から、このような指摘はなされているが、これらの情報をもう一度詳細に整理し検討すると、単なる物語間の類似ということだけでなく、『石清水物語』独自の特異性が見えてくると思われる。そこで、『石清水物語』の伊予守の出家場面と、釈迦の出家の故事と『海人の刈藻』との関係を詳しく見ていきたい。

一　伊予守の出家場面と釈迦出家の故事との関係

まず最初に、多少長くなるが『石清水物語』の伊予守の出家場面を挙げる。

暁になるらんとおもふほどに、やをら起出て、めのとごなる衛門のぜうとて、かげかたちのごとく身をはなれず、いかならん折もおくれじと契おきたるが臥たる所に行て、忍びておこせば、もとよりめさましたる、いそぎおきあがりたるに、「只今、此ちかき処へ、人にしられで出べきことあり。をのれひとりをともにぐしてと思ふを、しのびて馬にくらおかせよ」といへば、あやしとは思へど、さいふべきならねば、「いづれの御馬にか」といへば、おにぐろといひて、過にしいくさにも、人にまさりて心ある馬にて、それ故名をもあげさせたりしを、「それにくらをけ」といふに、おぼろけにては、たゞのありきには乗り給はぬにと心得がたく思へど、それにつきたるとねりは、あだならぬ物にてあるを、みそかにおこして、音なくしたゝめさせて、又人もぐせず。（中略）

明はつるほどに、たかをといふ所に行つきて、ぢやうろくのあみだのおはする御前にひざまづきて、かたなをとり出て、もとゞりおしきりつるに、めのとごの衛門のぜう、あやしとはおもひつれども、目もくれて、まへにたをれふし泣まどふけしき、

たとへむかたなきをみるに、世の常の人ならば、心よはかるべけれど、何事も一ことにたけき心は、おもひきりにける後は、中〳〵恋しき人もなく、すゞしく覚えて、「是ほど心よはく、ふかく成べしとは、年頃しらで、こゝまでもともなひける我心こそ、はかなかりけり」といへば、なく〳〵おきあがりて、「いとけなく侍しより、かた時御身をはなれず、うみ山とも頼きこへて、朝夕みあげ奉り侍るに、そこらの人を京にて、たかきいやしき見あつめ侍しに、君ばかりなる人をいまだ見奉らず。一とせのいくさにも、多くの人の中に御かうみやうをきはめ、八ヶ国の中に名を上させ給しも、我君にてこそおはしませば、いかほどうれしとおぼえ侍し。ゆみや取るならひにて、又いか成乱も有て、うち死をばせさせ給はゞ、其御供つかうまつらんとこそおもひ給へるに、かゝる事を見奉るに、気も心もうせて侍」といひもやらず、頓而こしより刀とり出て、同じく切捨つ。

是をみて、とねり男もともにきらんとするに、大きにゐさめて「我に志ふかくは、とく〳〵此馬をぐして帰りて、いぬ若につくべし。あまたの中に、分ておもひつる故に、さいごの供にぐしつるを、とねり故にこそふかくをもかき、かうみやうをもすれ。いぬわかゞことをおもへば、いふなり。とく〳〵帰べし」とて、たぶさをつゝみ、「女に奉れ」とてとらすれば、声を立てなき悲しむ事かぎりなし。馬をひき出て、「生ある物なれば、心は人に同じ。ちくしやうのるい、世におほしといへども、汝、我にえむふかく恩あるものなれば、とりわきこゝまでも乗也。すみやかにぼだひの心を起して、ちくるいのくるしみをまぬかるべし」といふを、耳にさして聞て、目より涙をはら〳〵とこぼし、まろびふしくるめきたる程の、心あらん人にはまさりてあはれ也。日も高くなれば、「とく〳〵」といはれて、むなしきたぶさ計をもちて、馬をひきてかへりし心のうち、七多太子のこんでい駒をひき、かへりししやのくとねりも、是にはよもまさらじとおぼゆ。（一四六～一四八頁）

伊予守が出家を決意して邸を出、出家をとげるという一連の出来事は傍線部に添って見ていくと次のようにまとめることができる。

① 出家を決意した伊予守、乳母子の衛門の尉を起こしに行く。
② 伊予守、衛門の尉と舎人を連れて邸を出る。
③ 伊予守、髻を自分で切り捨てる。
④ 衛門の尉、伊予守に続いて髻を切り捨てる。
⑤ 舎人、伊予守に「馬（鬼黒）を連れて帰れ」と言われ、嘆き悲しむ。
⑥ 伊予守、髻を舎人に託す。
⑦ 馬（鬼黒）、伊予守との別れを悲しむ。
⑧ 一人戻る舎人の辛い心情の描写。

続いて、釈迦出家のあらましを見てみたい。釈迦出家の故事は『過去現在因果経』二巻、『釈迦譜』一巻、『釈迦降生釈種成仏縁譜』第四―三などに記載があり、法会や仏事の場において説法される話で

あったため、広く知られていた故事のようである。[3] 当時、流布し認知されていた悉達太子説話とは多少異なる点があるかもしれないが、出家場面を順序立てて書いてある『今昔物語集』巻第一「悉達太子出城入山語第四」から釈迦出家の経緯を見てみたい。

後夜ニ、浄居天及ビ欲界ノ諸ノ天虚空ニ充満テ、供ニ声ヲ同シテ太子ニ白テ言サク、「内外眷属皆悉ク眠リ臥タリ。只今此レ出家ノ時也」ト。[a] 太子此ヲ聞給テ、自ラ車匿ガ所ニ御シテ、「我ヲ乗セムガ為ニ、揵陟ニ鞍置テ可将来シ」ト。車匿、天ノ力ニ依テ不寝ズシテ有リ。太子ノ御言ヲ聞テ、身挙リ心戦テ云事無。暫ク有テ涙ヲ流シテ申サク、「我レ太子ノ御心ニ不違ジト思フ。又大王ノ勅命ヲ不背ト怖ル。又只今遊ニ可出給キ時ニ非ズ、又怨敵ヲ可降伏給キ日ニ非ズ。何ゾ後夜ノ中ニ馬ヲ召ゾヤ。何ノ所ヘ行ムト思食ゾ」ト。太子ノ宣ハク、「我今、一切衆生ノ為ニ煩悩・結使ノ賊ヲ降伏セムト思フ。汝チ我ガ心ニ不可違ズ」ト。車匿、涙ヲ流ス事雨ノ如シ。再ニ拒ミ申スト云ヘドモ、[b] 遂ニ馬ヲ牽テ来ル。(中略)

馬ノ駿キ事ト金翅鳥ノ如シ。車匿不離ズシテ御共ニ有リ。太子、跋伽仙人ノ苦行林ノ中ニ至リ給ヌ。馬ヨリ下リ給テ馬ノ背ヲ撫テ宣ク、「我レヲ爰ニ将来レリ、喜ビ思フ事無限シ」。又車匿ニ宣ハク、「世ノ人、或ハ心吉ト云ヘドモ形不随ズ、或ハ形チ吉ト云ドモ心ニ不叶ズ。汝ハ心・形皆違フ事無シ。我レ国ヲ捨テ此ノ山ニ来レリ。汝チ一人ノミ我ニ随ヘリ。甚ダ有難シ。我レ聖ノ所ニ来レリ。汝速ニ揵陟ヲ具シテ宮ニ返ネ」ト。車匿此ヲ聞テ、地ニ倒レテ哭キ悲シム事無限シ。[c] 揵陟モ「返ネ」ト宣フヲ聞テ、膝ヲ屈カヾメ跪舐テ、涙ヲ落ス事雨ノ如シ。車匿申テ云ク、「我レ宮ノ内ニシテ大王ノ勅ニ違テ、揵陟ヲ取テ太子ニ奉テ御共ニ参レリ。大王太子ヲ失ヒ奉リ給テ、定テ悲ビ迷ヒ給フラム。又宮ノ内ノ騒ギ愚ナラジ。我レ何トシテカ太子ヲ捨奉テ宮ニ返ラム」ト。太子ノ宣ハク、「世間ノ法ハ、一人死ス、一人生レヌ。永ク副フ事有ラムヤ」ト宣テ、車匿ニ向テ誓テ宣ハク、「過去ノ諸仏モ菩提ヲ成ムガ為メニ、飾ヲ棄テ髪ヲ剃給フ。今我モ又可然」ト宣テ、[d] 宝冠ノ髻ノ中ノ明珠ヲ抜テ車匿ニ与テ、「此ノ宝冠・明珠ヲバ父ノ王ニ可奉シ」。身ノ瓔珞ヲ脱テ、「此ヲ魔訶波闍ニ可奉シ。身ノ上ノ荘厳ノ具ヲバ耶輪陀羅ニ可与シ。汝チ永ク我ヲ恋フル心ロ無カレ。揵陟ヲ具シテ速ニ宮ニ返ネ」ト宣ヘドモ、更ニ不返ズシテ哭悲ム。

[e] 其時ニ太子、自カラ剣ヲ以テ髪ヲ剃給ヒツ。天帝釈来テ、髪ヲ取テ去給ヌ。虚空ノ諸天ハ香ヲ焼キ花ヲ散シテ、「善哉々々」ト讃奉ル。(中略)

其時ニ浄居天、本ノ形ニ成テ虚空ニ昇ヌレバ、空中ニ光明アリ。車匿此ヲ見テ、太子返給マジト知テ、地ニ臥テ弥ヨ悲ヲ増ス。太子車匿ニ宣ハク、「汝チ速カニ宮ニ返テ、具ニ我ガ事ヲ可申シ」ト。[f] 然レバ車匿ハ蹄ヒ滯ビ、揵陟ハ悲ビ泣テ道ノマヽニ帰リヌ。(『今昔物語集一』一八頁[4])

この話の要点をおさえ、釈迦出家の経緯を見てみると次のようにまとめられる。

（一）　出家を決意した悉達太子、車匿舎人を起こしに行く。
（二）　悉達太子、車匿舎人を連れて宮を出る。
（三）　車匿舎人、悉達太子に「馬（揵陟）を連れて帰れ」と言われ、歎き悲しむ。
（四）　馬（揵陟）、悉達太子との別れを悲しむ。
（五）　悉達太子、装飾具を車匿舎人に託す。
（六）　悉達太子、自ら剃髪する。
（七）　車匿舎人と馬（揵陟）泣き悲しみながら帰路につく。

先に引用した『石清水物語』における伊予守の出家場面と比較すると、それぞれ①と（一）、②と（二）、③と（六）、⑤と（三）、⑥と（五）、⑦と（四）が対応していることがわかる。②と（二）におけるつき従う従者の数の違いや、⑥と（五）における舎人に託した品物の違いなど、多少の相違や順序の入れ替わりはあるものの、一見しただけで伊予守の出家場面は、釈迦の故事をなぞっていることがわかるだろう。特に、⑦と（四）におけるそれぞれの馬が別れを悲しむという箇所は興味深い。「帰ネ」と言われた悉達太子の馬（揵陟）は、涙を雨のように流しながら、膝をかがめ蹄をなめて悉達太子との別れを拒否している。一方、伊予守の馬（鬼黒）も、伊予守が諭す言葉を「耳にさして聞」き、涙を流し倒れ臥して別れを悲しむという馬である。鬼黒は揵陟のように人の感情や言葉を解する特殊な馬として描写される。このような特殊な馬が物語内に描写されることは殊に珍しいであろうから、鬼黒の記述を見れば、⑧において「七多太子」という明確な名が現れる前に、読者は容易に悉達太子の故事を思い起したであろう。

『石清水物語』以外で作中に釈迦の出家場面を登場させている物語類を確認すると、『海人の刈藻』『苔の衣』『平家物語』『曾我物語』などに釈迦の出家場面に関する記述が見られる。[5] しかし、いずれの作品中にも『石清水物語』のように出家する登場人物の行動に釈迦出家の故事を重ねて描写するというような趣向は見られない。多くは先にあげた『石清水物語』の⑧の「七多太子のこんでい駒をひき、かへりししやのくとねりも、是にはよもまさらじとおぼゆ」という表現と同様に、物語中で出家に関する悲しみの強さを喩えるために釈迦の出家場面を引き合いに出すという例が多い。例えば、『苔の衣』では出家を決意した苔衣の大将が、残される母親の心情に思いを馳せる際に「母上の昨日の御気色思し出でられて罪深く思さるれど、悉達太子檀特山へ入り給ひけんに、浄飯大王もさこそは嘆き給ひけめ」（秋・一八五頁[6]）と表現され、『平家物語』では維盛が出家し入水をする場面で、付き従う舎人武里の辛い心情を「むかし悉達太子の檀特山に入らせ給ひし時、車匿舎人がこんでい駒を給はッて、王宮にかへりし悲しみも、是には過ぎじとを見えし」（三日平氏・三一七頁[7]）と表現している。『海人の刈藻』や『曾我物語』も『平家物

語』と同様に、出家する登場人物に随う舎人の心情を喩える時に同じような表現がみられるのである。つまり、悉達太子出家の説話を物語内に取り入れる場合、その方法は、登場人物たちの心情を悉達太子説話内の人物に喩えることが一般的であり類型的であったといえよう。しかし、『石清水物語』は他の物語に見られるように、登場人物の出家に関する悲しみの強さを表現するために釈迦の故事を引用するだけではなく、伊予守の出家場面を釈迦のそれに重ねあわせて描くという手法を取っているのである。このことは他の物語には見られない『石清水物語』の独自性であろうし、この手法をとることで、伊予守の出家場面に必然性と奥行きを与えていると考えられる。

二　伊予守の出家場面と『海人の刈藻』との関係

さて、続いて『海人の刈藻』と伊予守出家場面との関係を見ていきたい。すでに、伊予守の出家場面が『海人の刈藻』における一条院の新中納言の出家場面に酷似しているという指摘はあるが、これも詳しく見ていくとただの類似ではなく『石清水物語』の独自性が明らかとなるのである。

まず、『海人の刈藻』における新中納言の出家の経緯をみてみたい。

御随身なりつぎに御馬用意させて、「夜のうちに山へ」とぞのたまふ。心知らぬ舎人一人具して参る。やすらかにうち乗り給ひて出で給ふ。さすがにかきくらす心地し給ふ。「悉達太子の王宮を出で給ひしには、父帝・耶輸陀羅女の御別れやおはしけん、これは大宮・若君の御名残ならん」とぞ推し量らるる。

明け果つるほどに、山におはし着きぬ。

一条院には、つとめて、「遅く起き給ふ」と思ふに、若君、「て て」と尋ね給へば、宰相の乳母参りたるに、取りしたためたるやうにて、床の上に文あり。あやしくて見れば、御笛に添ひたる文は、「斎宮へ」とあり、「大宮」「大将殿」とあり。

あやしく、胸うち騒ぎて、斎宮にこのよし啓して、文奉れば、おどろかせ給ひて引き開け御覧ずれど、目も霧りふたがるに、女別当・宣旨など見聞こゆれば、

「よべ聞こえまほしかりつるを、大宮など諫めさせ給はん、かたじけなさに、え啓し侍らずなん。今も暫くもあらまほしけれど、命絶ゆべきことを仏の定かに知らせ給ふこと侍れば、『しばしがほども勤め侍らん』とてなむ。大宮をはじめ奉り、思し嘆かんこと、罪避り所なく。さりとて、『御目の前にて亡き身と御覧ぜられんよりは』と思ひ侍り。幼き者は、生ひ立たんままに、山の座主に奉り給へ。法師のこころざし深く侍り。この笛は、故院、大将の今ひとつも大人しくて、欲しがり申されしに、『これは思ふことあり』とて、我に賜はせたり。こころざしかたじけなくて、五つの年より身を放ち侍らぬなり。法師なりとも、形見に賜はせよ」

など、こまごまと書きて、

伝へてしうきねをしのべ笛竹のこの別れこそ世にたぐひなき

見給ふ御心ども、夢とも分き難し。大宮は文を御顔に押しあてて、うつぶし臥し給ふ。「御厩の馬も、随身も侍らず」など申すに、あさましともおろかなり。（中略）

昼つかた、御馬の引き返して参りけり。「いかにや」と尋ね給へば、「年ごろ聖の坊におはしまして、かねて契り給へるにや、さうなく御髪下ろして、御衣・袈裟などかけさせ奉り侍り。『なりつぎも帰り参れ』とのたまはせれど、みづから頭下ろして、かれも候ふ。あはれにかたじけなかりしかば、『御ともに』と申し侍りしかど、『都に騒がせ給はんこともかたじけなし。帰り参りて、ありさま申せ』と侍りし」とて泣くさま、かの車匿舎人が帰りけむ人の朝廷まで推し量られて、あはれなり。（巻四・一八三頁）

新中納言の出家の経緯を傍線部に添って記すと以下のようになる。

① 中納言、随身のなりつぎと舎人を連れて邸を出る。
② 翌朝、中納言の子である若君が父を探す。
③ 若君に尋ねられた宰相の乳母、中納言の文を三通見つける。
④ 大宮、文を顔に押し当てて悲しむ。
⑤ 人々、中納言の不在を騒ぐ。
⑥ 昼頃、邸に戻った舎人、ことの有様を語る。

『石清水物語』とは違い、『海人の刈藻』の場合は、中納言が随身と舎人の二人を連れて出発したという記述の後は、出家の経緯は詳しく語られず、⑥における舎人の語りがその役割を果たしている。その舎人が語る内容をみると、随身のなりつぎが中納言の出家を追って髪を下ろしたという件が、先に引用した『石清水物語』の④「衛門の尉、伊予守に続いて髻を切り捨てる」に該当するが、それ以外の出家の経緯の部分では両物語間の類似は、ほぼないといってよい。しかし、翌朝からの後日談では、両物語間でかなりの類似がみられるのである。では、『石清水物語』の伊予守出家の後日談の場面を挙げてみる。

ふるさとには、つとめて子どもおき出たるに、かたはらに人もなし。あなたにかと思えども、みえず。「いづくにおはするぞ」と尋ありくに、ひとぐきゝて見るに、枕なるたちもさながらあるに、小づくえのうへに、封じたる文三つあり。ひとつは大将殿へとおぼしくて、つかうまつりし人の名をかきたり。今一は我上にとみへたり。又一は「弁のかたへ」とて、ひたちのうちに衣、染物などやうの物の多く出くるこほり一所のけんの、ゆづり文書そへて、大きに巻きて、そくいふうじたり。すべて、みなさしならべてあり。「みまや、鬼黒もなし。え門のぜうもみえず」などさはぎ立ぬるに、女は思ひあはする事あれば、かなしともおろか也。心ぎもゝなくたえがたけれど、からうして文をみるに、「心より外に、とし頃へだてありておもはれしことのくやしさ」など、こまかに書て、「けふをおしみ

ても、あすまたぬ世の習ひなれば、終にすまじき別ならぬを、あいべつりくのことはりも、きはまさりぬる事をおぼしなぐさめに、今一度はあふせあるなれば、それをたのみに」と書続たるを、[10]かほにおしあてゝ、ひれふしぬるもことはり也。男は十五、女は十三より見なれたりつるに、かぎりあらん道こそちからなき事ならめ、生ながらの別は、げに今すこしなぐさまれざりけん。「みたちをはせず」とのゝしりたちぬれば、こゝかしこにみちて、るすいもとよりあつまりつどひて、泣さはぐほど、ものも聞えずおびたゝし。

[16]ひるつけてぞ、とねりむまをひきて、なく〳〵出来て、有つる次第、の給へる事ども語りてふしまろぶも、さこそはおもふらめと哀也。（一四八～一四九頁）

傍線部に添って内容をまとめると、次のようになる。

（一）　伊予守が出発した翌朝、子供が伊予守を探す。

（二）　子供の声を聞いた人々、伊予守の文を三通見つける。

（三）　人々、伊予守の不在を騒ぐ。

（四）　伊予守の妻、顔に文を押し当てて悲しむ。

（五）　昼頃、邸に戻った舎人、事の有様を語る。

先の『海人の刈藻』と『石清水物語』を比べると、②と（一）、③と（二）、④と（四）、⑤と（三）、⑥と（五）が一致していることがわかる。④と（四）において、悲しむ人物が中納言の育ての親ともいうべき大宮であるか伊予守の妻であるかの違いと、⑥と（五）において、舎人が語る内容に相違があるものの、そのほかは酷似しているといってよい。①においても、悉達太子の故事では、出家の際の従者は舎人一人だけだったのだが、『海人の刈藻』の新中納言は随身なりつぎと舎人二人を引き連れている。同じく伊予守も乳母子の衛門の尉と舎人を引き連れており、この点でも類似が見られる。つまり、出家の経緯における伊予守の行動は釈迦の出家場面になぞらえられているが、同行させた従者の数、舎人以外の従者二人がそれぞれの主人公の出家を追って自らも出家すること、また出家の後日談での周囲の人々との関わりなどは『海人の刈藻』に類似していることが分かる。このような設定の類似や、置手紙の数、中納言と伊予守それぞれの不在を騒ぐ人々の台詞、悲しむ大宮と伊予守の妻の様子の類似などを考えると、この両物語はどちらか一方が他方に影響を与えたと考えられるのではないだろうか。

三『石清水物語』と『海人の刈藻』の影響関係

さて、そこでどちらがどちらに影響を与えたのかと考える時、問題となるのは両物語の成立年代である。『石清水物語』は、作中に「三月づゝ京にのぼりて、大ばんといふ事をつとむる事」と大番役の記述があることから、大番役の法令が発令された宝治元年（一二四七）以降の成立であると考えられている。また、作中にある五首の歌が『風葉和歌集』にみられることから、文永八年（一二七一）以前に成立したものであるとされており、おおよそ一二四一年から一二七

一年の間の成立と考えられている。一方『海人の刈藻』は『拾遺百番歌合』及び『風葉和歌集』にとられた歌が現存本に見あたらないことから、現存本は原作本を改作したものであることが知られている。藤原定家が編纂し元久三年（一二〇六）までの成立とされる『拾遺百番歌合』に『海人の刈藻』から歌三首が採られていることから、すでにその頃には原作本があったことが知られ、また『風葉和歌集』に所収の四首の和歌が現存本には見えないことから改作された現存本の成立ははやくとも文永八年（一二七一）以後と考えられている。

このようにみると、どちらの物語が影響を与えたのかを判断するのは非常に難しい。しかし、『海人の刈藻』の改作について妹尾好信先生は『拾遺百番歌合』と『風葉和歌集』に所収される『海人の刈藻』の歌計七首（二首の重複歌あり。）が現存本には見えない歌ではあるものの、詞書は現存本の内容とほぼ一致し、五首の和歌が置かれていたはずの箇所は現存本において容易に確定することができることを指摘され、「本物語は、鎌倉初期以前（おそらくは平安末期）に作られた原作本を、『風葉集』成立以後に、全体の構成や登場人物の設定にはあまり変更を加えずに改作したものと見られるのである。」[9]と述べておられる。このように、『海人の刈藻』における原作本と現存本の内容がほぼ同じものと考えられるのならば、影響関係を考える際、原作本『海人の刈藻』が『石清水物語』よりも成立が前であることを考え合わせると、『海人の刈藻』が『石清水物語』に影響を与えたといえるのではなかろうか。

おわりに

以上、『石清水物語』における伊予守の出家場面について、悉達太子の故事と『海人の刈藻』とを通して考察してきた。

伊予守の出家場面とこれらの関係を整理すると、伊予守出家の経緯は悉達太子の出家の故事になぞらえて描かれながらも、出家場面で引き連れていく従者の数や出家の後日談という他の登場人物達との関わりについては『海人の刈藻』から影響を受けていることがわかるのである。

〔注〕

(1)『石清水物語』の本文はすべて『鎌倉時代物語集成　第二巻』（市古貞次氏・三角洋一氏　平成1　笠間書院）により、一部私に傍線を付し、引用末尾に頁数を記した。また他本によって本文を校訂し、清濁及び句読点を改めた。

(2) 桑原博史氏「第六章　石清水物語について」（『中世物語の基礎的研究　資料と史的考察』昭和44　風間書房）

(3)釈迦出家の故事の流布については、三角洋一氏「（受容）王朝物語の行方　実例『石清水物語』」（「國文学―解釈と教材の研究―」第三六巻十号　平成3・9）に詳しく述べられている。

(4)『今昔物語集』の本文はすべて『新日本古典文学大系33　今昔物語集一』（今野達氏　平成11　岩波書店）により、一部私に傍

線を付した。また引用末尾に頁数を記した。

(5) 釈迦出家の故事については、他にも『梁塵秘抄』『沙石集』『栄花物語』『太平記』にも記述が見られるが、御堂の絵の説明や無常の喩えとして使われており、登場人物の感情を喩えるための記述ではない。

(6)『苔の衣』の本文は『中世王朝物語全集7　苔の衣』(今井源衛氏　平成8　笠間書院)により、引用末尾に頁数を記した。

(7)『平家物語』の本文は『新編日本古典文学全集46　平家物語②』(市古貞次氏　平成6　小学館)により、引用末尾に頁数を記した。

(8)『海人の刈藻』の本文はすべて『中世王朝物語全集2　海人の刈藻』(妹尾好信先生著　平成7　笠間書院)により、一部私に傍線を付した。

(9) 前掲注(8)書「解題」。

―― あらい・かずみ、広島大学大学院博士課程前期在学 ――